



ラムサール条約に登録された酒沼を訪れてみた。日差しは穏やかで風も弱く、春を思わせるような暖かさ。サザンカの花が青空に映えていた。「小春日和」である。

小春日和は「晩秋から初冬にかけての暖かく穏やかな晴天」と定義されている。小春日和は冬季、西のシベリア大陸方面で気圧が高く、東の太平洋側で低くなる「西高東低」と呼ばれる典型的な気圧配置が一時的に弱まり、北西の季節風の吹き出しも収まる時期に出現する。

2015.12.13



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

小春日和

3カ月予報（12月～2月）によると、関東・甲信越地方は暖冬が予想されている。平年値を基準に平均気温を3階級（低い、並、高い）に区分したとき、それぞれが実現する確率は20、40、40%となっており、並以上の合計は80%だ。

その根拠は、エルニーニョ現象が史上第3位となるほど発達していることによる。ふだん、インドネシア付近の海面水温は暖かいので低圧部となっているが、エルニーニョ現象が発生すると、その領域が東の中部太平洋にシフトするため水温が下がり、高気圧が形成されやすくなる。シベリア大陸の高気圧もあまり発達しないので季節風も弱い。小春日和も現われやすい。

暖冬の時期は、南岸を東進する低気圧で関東地方が大雪になることがよくある。暖冬は有難いが要注意である。

（元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住）



今年の冬至は12月22日。1年で太陽高度が最も低くなる日、したがって昼の時間が最も短い。水戸でみれば、日の出が午前6時46分、日の入りは午後4時27分だから、昼間は9時間半ほどしかなく、北の札幌では9時間である。この時期、北半球に注ぐ日射量が最も弱くなるのでシベリア大陸も冷え、「冬將軍」の象徴である北西の季節風をもたらす高気圧も発達する。

一方、南半球では季節はまったく逆で、昼間が最も長くなり、これから真夏に向かう。12月にメルボルンに旅したとき、夏のような街中を

2015.12.20



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

一陽来復

サンタさんが練り歩き、ジングルベルが聞こえたのはびっくりしたが、地球は確かに球である。

太陽は冬至を境に北への旅を開始するので、日脚が徐々に伸び、いくつかの小春日和を経て、春分へと向かう。

「一陽来復」という言葉がある。陰暦で冬の陰気が去り、陽気が再び巡り来る節目とされ、冬至に対応する。新しい年への期待や幸運も込められており、「一陽来復」のお札を授与する神社もある。家庭では健康を祈念したゆず湯がたかれ、冬至かぼちゃが食卓に上る。

常陸一の宮と称される鹿島神宮＝写真＝を訪れると、年の瀬にも多くの参拝客があり、楼門の朱と赤いユニホーム姿の観光ボランティアの笑顔が印象的だった。正月三が日には鹿嶋市の人口の10倍を超える70万人ほどが訪れるという。

（元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住）